第三章　基督教會に捨てられし時

（注意）茲に用ゆる基督教並に信者なる語は普通世に稱する教會並に信者を謂ふものにして何れか眞何れか僞は全能なる神のみ知り玉ふなり

人は集合する動物なり（Gregarious animal）、單獨は彼の性にあらず、白鷺の如く獨り曠野に巣を結び、痛切なる悲聲、聞くものをして戰慄せしむる動物あり、飜魚（まんぼう）の如く大洋中箇々に棲息し唯寂寥を破らん爲にか空に向て飛揚を試むる奇性魚あり、又は狸の如く好で日光を避け、古木の下或は陰鬱たる岩石の間に小穴を穿ち、生れて、生んで、死する、動物あり、然れども人は水産上國家の大富源なる鰊（にしん）、鱈（たら）、鯖（さば）魚の如く、南米の糞山を作る海鳥の如く、ロッキー山を攀じ登る山羊の如く、集合動物にして、古人の言いし如く單獨を歡ぶ人は神にあらざれば野獣なり。

余は斯（この）未信教國に生れ余の父母兄弟國人が嫌惡したる耶蘇教に入れり、余の始めて此教を聽し頃は全國の信徒二千に滿たず、殊に教會は互に相離れ遠かりければ此新來の宗教を信ずるものは實に寥々寂々（りやうりやうせきせき）たりき、然れども一たびその大道を耳にしてより、これを以て自己を救ひ國を救ふ唯一の道と信じたれば、社會に嫌惡せらるゝにも關せず、余の親戚の反對するをも意とせず、幾多の舊時の習慣と情實とを破りて新宗教に入りし事なれば、寂漠の情は以前に倍せしと共に仝（どう）宗教に於ける親愛の情は實に骨肉も啻（たゞ）ならざりき、當時余は思へらく基督教會

なるものは地上の天國にして其内に猜疑憎惡の少しも存する事なく、未信者社會に於ては萬事に懸念し、心に存せざる事を云ひ、存する事を云はざるも、此新社會に於ては全教會員皆心靈に於ける兄弟姉妹なれば骨肉にも語り得ぬ事も自由に語るを得、若し余に失策あるとも誰も余の本心を疑ふものはなきものと確信し、其安心喜樂は實に筆にも紙にも書き盡されぬ程にありき。

嗚呼なつかしきかな余の生れ出し北地僻鄕の教會よ、朝に夕に信徒相會し、木曜日の夜半の祈祷會、土曜日の山上の集會、日曜終日の談話、祈祷、聖書研究、偶々會員病むものあれば信徒交々不眠の看護をなし、旅立を送る時、送らるゝ時、祈祷と讃美と聖書とは我等の口と心とを離れし暇は殆どなかりき、偶々外より基督信徒の來るあれば我等は舊友に會せしが如く、敵地に在て味方に會せしが如く、打悅びて之を迎へたり、基督信徒にして惡人ありとは我等の思はんとするも思ふ事能はざりき。

然れども此小兒的の感念は遠からずして破碎せられたり、余は基督教會は善人のみの巢窟にあらざるを悟らざるを得ざるに至れり、余は教會内に於ても氣を許すべからざるを知るに至れり、加之余の最も祕藏の意見も、高潔の思想も、勇壯の行績も、余をして基督教會に嫌惡せしむるに至れり。

余は基督教の必要なる基本として左の大個條を信ぜり、

主たる爾なんじの神を拜し惟之ただこれにのみ事つかうべし

（出埃及二十章三、四、五、申命記十章二十、馬太傳四章十）

而して神と眞理とを知る惟一の途としては使徒保羅の語にしてルーテルが彼の信仰の城壁と賴み「プロテスタ

ント」教の基石きせきとなりし左の題字を以てせり、

兄弟よ我なんぢらに示す我が曾て爾等に傳へし所の福音は人より出づるにあらず、蓋しわれ之を人より受けず亦教へられず、惟イエス、キリストの默示に由て受たれば也

（加拉太書第一章十一、十二）

此等の確信が余の心中に定まりたればこそ余は意を決して余の祖先傳來の習慣と宗教とを脱して新宗教に入りしなり、余は心靈の自由を得んが爲に基督教に歸依せり、僧侶神官を捨てしは他種の僧侶輩に束縛せられんが爲にあらざりしなり。

宇宙の神を以て余の父の父と尊み、彼自身よりの默示を以て眞理の標準と信じ、己の一身を處するに於ても、余の國に盡さんとするに於ても、基督教會に對する余の位置に於ても、余は悉く此標準に依て行はん事を勤めたり、然るに余の智能の發達するに從ひ、余の經驗の積むと共に、余の信仰の進むと仝時に、余の思想並に行蹟に於て屢々彼の基督教先達者、此の神學博士と意見全く相合するを得ざるに至れり、或は余の一身を處するに於て忠實なる一信徒より忠告を蒙るあり、曰く、「君の行蹟は聖典の明白なる教訓に反せり君宜しく改むべし」と、親愛なる友人の忠告として余は再び三度己を省みたり、然れども沈思默考に加ふるに祈祷と聖典研究の結果を以て而後友人の忠告必しも眞理なりと信ぜざる時は不得止自己の意志に從ふたり、友人は余を信ずるを以て敢て余の彼が言に從はざるを忿らずと雖も、余を愛せざる兄弟姉妹（？）の眼よりは余は聖典の教訓に逆らひしもの、基督より後戻りせしもの、特種の天惠を放棄せしものと見做さるゝに至れり。

余の神學上の思想についても、余の傳道上の方針に就ても、余の伝道上の方針に就ひても、余の教育上の主義に就ても、余は余の眞理と信ずる所を堅守するが爲めに或は有名博識なる神學者に遠けられ、或は基督教會内に於て非常の人望を有する高德者より無神論者として擯斥せられ、終には教會全躰より危險なる異端論者、聖書を蔑にする不敬人、ユニテリアン（惡しき意味にて）、ヒクサイト、狂人、名譽の跡を逐おう野望家、教會の狼等の名稱を付せられ、余の信仰行蹟を責むるに止まらずして余の意見も本心も悉く過酷の批評を蒙むるに至れり。

嗚呼余は大惡人にならずや、余は人も我も博識と見認めたる神學者に異端論者と定められたり、余は實に異端論者にあらざるか、余に先ずる十數年以前より基督教を信じ而も歐米大家の信用を有し全教會の頭梁として仰がるゝ某高德家は余を無神論者なりと云へり、余は實に無神論者にあらざるか、名を宗教社會に轟かし、印度に支那に日本に福音を傳ふる事十數年、而も博士の號二三を有する老練なる某宣教師は余はユニテリアンなりと云へり、余は實に救主の贖罪を信ぜず自己の善行にのみ賴むユニテリアンならざるか、傳道醫師として有力なる某教師は余を狂人なりとの診斷を下せり、余は實に知覺を失ひしものなるや、教會全躰は危險物として余を遠けたり、余は實に惡鬼の使者として綿羊の皮を蒙りながら神の教會を荒す爲めに世に產出されし有害物なるか、余を惡人視するものは萬人にして辨護するものは己一人なり、萬人の證據と一人の確信と何れが重きや、然らば余は基督信者にはあらざりしなり、余は自己を欺きつゝありしものにして余の眞性は惡鬼なりしなり、何ぞ今日よりは基督信徒たるの名を全く脫し普通世人の世涯に歸らざる、否な、斯に留らずして余の今日迄基督教の爲めに盡せし心實と熱心とを以て余を敵視する基督教會を攻擊せざる、何ぞ余の敵の神に祈るを得むや、何ぞ余の敵の聖書を

尊敬し研究するを得むや、余はユニテリアンなり、無神論者なり、僞善者なり、神の教會に屬すべからざるものなり、狼なり、狂人なり、よし今より後はユーム、ボーリンブローク、ギボン、インガソールの輩を學び一刀を基督教の上に試みばや。

此時に當て余の信仰は實に風前の燈火の如くなりし、余は信仰墮落の最終點に達せんとせり、憤怨は余をして信仰上の自殺を行はしめんとせり、余の仝情は今は無神論者の上にありき、ジョン、スチワート、ミルの死を聞て神に感謝せし某監督の無情を怒れり、トマス、ペーンの臨終の狀態を摘要して意氣揚々たる神學者の粗暴を歎ぜり、嗚呼幾干の無神論者は基督教信徒自身の製造に罹るや、余は曾て聞けり、無病の人をして清潔なる寐床の上に置き而して彼は危險なる病に罹れる患者なれば今は病床の上にありと側より絶へず彼に告ぐれば無病健全なる人も直に眞正の病人となると、人を神より遠からしめ神の教會を攻擊せしむるものは必しも惡鬼とその子供にあらざるなり。

然れ共神よ、我が救主よ、爾は此危險より余を救ひ玉ひたり、人聖書を以て余を責むる時之が防禦に足るの武器は聖書なり、教會と神學者は余を捨つるも余の未だ聖書を捨つる能はざるは余は未だ爾に捨てられざるの一徵候なり、余は爾の下僕ルーテルが我の福音なりとて縋りし加拉太書に行かむ、而して彼の平易なる獨逸語を以て著述せし其註解書を讀まん、「今よりのち誰も我を擾す勿れ、蓋はわれ身にイエスの印記を佩たれば也」（六章拾七節）、嗚呼何たる快ぞ、余も不足ながらもイエスの名を世人の前に表白せしにあらずや、余も余の罪より遁ん

が爲めに「イエス」の十字架にすがるにあらずや、余の信者なると不信者なるとは他人の批評如何に由るにあらずして、余にイエスの印記(しるし)あるとなきとに由る也、「義人は信仰に依て生くべし」(三章十一節)と、然り余は今は自己の善行に憑らずして十字架上に現はれたる神の小羊の贖罪に頼めり、是の信仰こそ余が神の小供たるの證據なり、キリストを十字に附けしものは悉皆(しつかい)惡人無神論者なりしか、彼の弟子を迫害しながら神に盡くしつゝありしと信ぜしものもありしにあらずや、約百(ジョブ)の友は彼の不幸艱難を以て彼の惡人たるの證となせり、然れども神は彼の三人の友に勝りて約百を愛し賜ひしにあらずや、衆人の誹毀(ひき)に對し自己の尊嚴と獨立とを維持せしむるに於て無比の力を有するものは聖書なり、聖書は孤獨者の楯、弱者の城壁、誤解人物の休所なり、之れに依てのみ余は法王にも大監督にも神學博士にも牧師にも宣教師にも抗する事を得るなり、余は聖書を捨てざるべし、他の人は彼等に抗せん爲めに聖書を捨て聖書を攻撃せり、余は余の弱きを知れば聖書なる鉄壁の後に隱れ、余を無神者と呼ぶもの、余を狼と稱するものと戰はんのみ、何ぞ此堅城を彼等に讓り野外防禦なきの地に立て彼等の無情淺薄狹量固執の矢に此身を露すべけんや、

With one voice, O world, though thou deniest,
Stand thou on that side — for on this I am!

世人は同音一齊に我を拒むとも
彼等は彼方に立て、我獨り此方に立たむ

時に惡靈余に告て曰く、「汝未だ若年、經驗積まず、學修まらず、何ぞ汝の身を先達老練家の指揮に任ぜざる、

自己の言行を以て最良なるものと見做すは平凡人のなす處にして、汝が他人の言を容れざるは是れ汝が高慢不遜なるの證なり、汝は自己を以て最も才智ある最も學識ある最も經驗あるものと致すや」と。

余は余の無學無智なるを知る、又大監督神學博士の聲名決して輕ずべからざるを知る、然れども余の無學なるが故に余は余の身も信仰も働も是等高名の人の手に任すべしとならば余は未だ自己を支配する能はざるものなり、余にして是と彼とを分別するの力なきならば余は誰に由て身を處せんや、見よ彼等余の不遜を責むるものも亦相互に說を異にするにあらずや、監督教會は自己の教會を稱して The Church（惟一の教會）と云ひ、一方には羅馬教會の擅行を批難しながら他方には他の新教徒に附する(Dissenters)分離者とか（Nonconformists)不合者とかの聞き惡き名稱を以てするに非ずや、余は組合派の教師が余が最も信任するメソヂスト派の教師を罵詈するを耳にせり、ユニテリアンはオルソドックスの迷信を笑ひ、後者は前者の不遜異端を責むるにあらずや、其他長老派の固執なる、浸禮派の獨尊なる、或は「クリスチャン」派とか、新エルサレム派とか、ブラダレン派とか、各々其特種の教義を揚言し、自派を賞贊して他派を蔑視するにあらずや、博識才能あるもの何ぞ一派の特有物ならんや、余にして自己の信仰を定むる能はざれば余は果して何れの派に己を投ずべきか、カルヂナル、マニングが天主教會の高僧なりしが故に余は法王の命に從ふべきか、監督ヒーバー、ヂーン、スタンレーが英國監督派なりしが故に余は監督教會に屬すべきか、ジヤドソンが浸禮教會の人なりしが故に余は「バプチスト」たるべきか、リビングストンが長老教會の人なりしが故に余も亦彼と教派を仝うすべきか、若し人物を以て余の教會上の位置を定むべしとなれば余はユニテリアンたるべきなり、何となれば、余の最も尊敬するチヤニング、ガリソン、ロー

エルの如きはユニテリアン教に屬したればなり、余はクエークルたるべきなり、何となればジョージ、フホクス、ウヰリヤム、ペン、スチーベン、クレゝツト、ウヰスター、モリスの輩は友會派の人たりしなればなり、余は普通基督教徒が目して論ずるに足らざるものと見做す小教派の中にも靄然たる君子、貞淑の貴婦人を目擊したり、惡魔よ汝の說教を休めよ、若し余にして善惡を區別し、之を撰び彼を捨つるの力を有せざれば、余は他人の奴隸となるべキものなり、心靈の貴重なるはその自立の性にあり、我最と少きものと雖も苟も全能者と直接の交通を爲し得べきものなり、神は法王監督牧師神學者輩の手を經ずして直接に余を敎え賜ふなり。

嗚呼眞理なる神よ、願くは余をして永久の愛に於て爾と一ならしめよ、余は時々多くの事物に關して讀み且つ聞くに倦めり、余の欲する處望む處は悉く爾に於て存するなり、總ての博士等をして默せしめよ、萬物は爾の前に靜かならしめよ、而して爾のみ余に語れよ。

トマス、アー、ケムピス

他人の忠告決して輕かろんずべきものにあらず、人は自身の面を見る能はざるが如く社會に於ける己の位置をも能く見る事能はざるべし、一切萬事我意を押通さんとするは傲慢頑愚の徵にして我等の宜しく注意すべき事なり。

然ればとて自己の意見を以て悉く信憑すべからざるものと斷念するも亦弱志病意の徵候なり、茲に博士モヅレーの言を聞け

It is not partiality to self alone upon which the idea is founded that you see your own cause best. There is an

element of reason in this idea; your judgment even appeals to you, that you must grasp most completely yourself what is so near to you, what so intimately relates to you; what by your situation, you have had a power of searching into.〃 —— Mozley's Sermon on 〝War〃.

人は殊更に能くその申分を判別し得べしとの觀念は必しも自己に對する偏頗心にのみ依るにあらずして公平なる理由の其中に存するあり、吾人の理達に訴ふるも吾人は吾人に接近する、吾人に緻密なる關係を有する、吾人の位置よりして自由に探究し得る事物に就ては、吾人自ら最も充分に是れを會得し得べきは明らかなり。

「戰爭」と題する說教中博士モヅレーの語

余は日本人なり、故に日本國と日本人民に關しては余は英國の碩學よりも、米國の博士よりも完全なる思想を有すべきものにして、此國と此民とを教化せんとするに於ては余は彼等に勝りて確實なる觀念を有することは當然たるべきなり、余はアイヌ人の國に到れば余のアイヌ人に勝る學識を有するの故を以てアイヌ人に關するアイヌ人の思想を輕ぜざるなり、余は小徑を山中に求むる時は余の地理天文に達し居るが故に樵夫の指揮を見貶さゞるなり、余の國と國人とに關して余が外國人の說を悉く容れざるは必しも余の傲慢なるが故にあらざるなり、日本は余の生國にして余の全身は此國土に繫がるゝものなれば余の此國に對する感情の他國人に勝るは當然なり、利害の大關係ある余の自國に關する余の觀念は他國人の此國に對する觀念よりも健全にして確實なりと信ずるは決して自身を賞揚するの甚しきものと云ふべからざるなり、又余の一身の所分に就ても余は余自身の事に關して

は最大最良なる專門學者なり、神の靈ならでは神のことを知るものなし、余の靈のみ余のことを知るなり。

余の神に對する信仰また然り、余に最も近く且余の最も知り易きものは神なり、哲學者ライプニッツ曰く

God is the only immediate and outward object of the soul — external objects of sense are but mediately and directly known. ——Leibnitz

〔心靈以外のものにして直接に識認し得るものは神のみ、感能を以て知り得る外物はたゞ間接にのみ認め得べし——ライプニッツ〕

余は余の神を知るに於てはプロテスタント教徒全躰が羅馬法王の取次を要せざるが如く監督又は「デヤコ」又は牧師又は執事又は勸士（くわんし）の取次をも要せざるなり。

反對論者曰く、若し君の說の如くならば教會の用何處にか存する、人は一箇人として立つ能はざればこそ教會の必要あるに非ずやと。

淺薄なる議論なり、視ずや同樣なる議論を以て天主教會は千五百年來他の基督教徒を責めつゝあるなり、同樣なる議論を以てアリビゼンス教徒は殺戮せられ、セルビタスは燒殺せられたり、教會なるものは神の子供の集合躰にして無私公平和愛慈悲の凝結なり、眞正の信徒ありて教會あるなり、教會ありて信徒あるにあらず、信徒は自然に教會を造るものなり、恰（あたか）も仝じ幹より養汁を吸收しつゝある枝葉は一植物たるが如し、人は眞理を知るの力を有し、直ちに神の「インスピレーション」に接するを得るものなりとは余が基督教基本の原理と信ずる處なり、眞理は眞理の證なり、教會必しも眞理の證にあらざるなり、教會は眞理を學ぶに於て善良なる扶助なるべけ

れ共、眞理は教會外に於ても學び得べきものなり。

“The destruction of the theory of the infallibility of the Bible has been one of the means by which we have been prevented from resting in the external and mechanical, and driven to what terrifies us at first as the intangibility and vagueness of the Spirit.” —— Rev. J. Llewellyn Davies, in the Fortnightly Review, reprinted in the Library Magazine of March, 1888.

聖書無誤謬說の破壞は我等をして外形的並びに器械的の基礎を捨てしめ、手にて觸るゝ能はざるもの、定義を付する能はざるものとして我等が始め恐怖せし靈の土臺に賴らざるを得ざらしむるものなり。

リューウェリン、デビス教師の語

教會無誤謬說も聖書無誤謬說と同時に中古時代の陳腐に付せる遺物として二十世期の人心より棄却すべきものなり。

是理論なり、然れ共世は未だ理論の世にはあらざるなり、憎愛は理論的にあらず、人は服從を愛して抵抗を惡むものなり、假令余は理論上確實なるにもせよ余の先輩と說を仝ふせず其指揮に從はざれば余は其保護の下に置かれざるは決して怪むべきにあらざるなり、余は教會に捨てられたり、余は余の現世の樂園と賴みし教會より勘當せられたり。

嗚呼神よ、此試錬にして余の未だ充分に爾を知らざる時に來りしならば余は全く爾の手より離れしならん、然

れども爾は余に堪ゆ能はざるの試錬を降さず、教會は余が自立し得る時に當て余を捨てたり、教會我を捨し時に爾は我を取り擧げたり、余の愛するもの去て余は　益々爾に近く、國人に捨てられて余は爾の懷にあり、教會に捨てられて余は爾の心を知れり。

教會が余を捨てざりし前は余は教會外の人を見る實に不公平なりき、余は思へらく基督教外に善人あるなしと、余は未信徒を以て神の子供と稱すべからざるものと思へり、然るに教會が余を冷遇し、其教師信徒が余の本心さへも疑ふ時、教會外の人にして反て余の眞意を諒察するものあるを見て、余は天父の慈悲は尚ほ多量に未信徒社會に存するを了れり、又教會外に立て局外よりこれを見る時は今日迄は神意の教導に由て歩む仁人君子の集合躰と思ひしものも亦その内に猜疑、僞善、佞奸の存するなきにあらざるを知れり、尖塔天を指して高く、風琴樂を和して幽なる處のみ神の教會ならざるを知れり、孝子家計の貧を補はんが爲めに寒夜に物を鬻ぐ處是神の教會ならずや、貞婦良人の病を苦慮し東天未だ白まざる前に社壇に願を込むる處是神の教會ならずや、余世の誤解する所となり攻撃四方に起る時友人あり獨り立て余を辨ずる時是神の教會ならずや、嗚呼神の教會を以て白壁又は赤瓦の内に存するものと思ひし余の拙なさよ、神の教會は宇宙の廣きが如く廣く、善人の多きがごとく多し、余は教會に捨てられたり而して余は宇宙の教會に入會せり。

余は教會に捨てられて始めて寛容寛宥の美德を了知するを得たり、余が小心翼々神と國とに事へんとする時に當て、余の神學上の說の異なるより教會は余の本心と意志とに疑念を懷き終に或は余を惡人と見るに至れり。

嗚呼余は余が佗人をさばきしが如くさばかれたり（馬太七章一、二）、余も教會にありし間は余の教會外の人を

議するに当てかくありしなり、基督教を信ぜざるが故に未信者は皆信用すべからざるものなり、法王に賴むが故に天主教徒は汚穢なる豕兒（Foul swine，ルーテルの語）なり、魯國宣教師に教化されし希臘教徒は國賊なり、監督教會は英國が世界を掠奪せんがための機關にして其信徒は黄白のために使役せらるゝ探偵なり、長老教會は野望人士の集合所なり、メソヂスト教會は不用人物の巣窟なり、クエークル派は僞善なり、ユニテリアン派は偶像教に勝る異端なりと、若し某氏の宗教事業の盛なるを聞けば曰く、彼世人に詔ふが故に彼の教會に聽衆多しと、某氏の學校の隆盛を聞けば曰く彼高貴に媚るが故に成功したりと、余は思へらく眞正の善人にして余と說を仝ふせざるの理由なしと、天主教徒たり、ユニテリアンたり、メソヂストたり、プレスビテリヤンたり、皆各々肉慾の充たすべきものあればこそ然るなれと、然れども教會に捨てられてより余の眼は開き、余の推察の情は頓に增加せり、學說を異にしても本心は善人たるを得べしとの大眞理は余はこの時において始て學び得たり、眞理は余一人の有にあらずして宇宙に存在する凡ての善人の有たる事を知れり、心の奥底より天主教徒たる人を余は想像し得るに至れり、充分なる良心の許可を得てユニテリアンたる事を余は疑はざるに至れり、余は始めて世界に宗教の多き理由と同宗教内に宗派の多く存在する理由とを解せり、眞理は富士山の壯大なるが如く大なり、一方より其全躰を見る能はざるなり、駿河より見る人は云ふ富士山の形はかくなりと、甲斐より見る人は云ふかくなりと、相模より見る人は云ふかくなりと、駿河の人は甲斐の人に向て汝の富士は僞りの富士なり云ふべけんや、若し自ら甲斐に行て之を望めば甲州人の言無理ならざるを知るべし、人間の力なきことと眞理の無限無窮なることとを知る人は思想のために他人を迫害せざるなり、全能の神のみ眞理の全躰を會得し得るものなり、他人を議す

る人は自己を神と仝視するものにして傲慢てふ惡靈の擒となりしものなり、己れ人に施されんとする事を亦人にも其如く施よ、余は無神論者にあらざれど余は無神論者視せられたり、余はユニテリアンならざるにユニテリアンとして遠ざけられたり、余を迫害せしものは余の境遇と教育と遺傳とを知らざるが故に余の思想を解する能はずして、余が彼らと仝說を維持せざるが故に余を異端となし惡人となせり、余は今より後余と說を異にする人を見るに然せざるべし、歐米人が日本人の思想を悉く解し能はざるが如く日本人も歐米人の思想を全く解することは難かるべし、然り寛容は基督教の美德なり、寛容ならざるものは基督教徒にあらざるなり。

教會に捨てられしものは余一人にあらざるなり。

會堂にありしもの是を聞て大に憤り、起てイエスを邑の外に出し投下さんとて、その邑の建ちたる崖にまで曳き往けり。

（路加傳第四章廿八、廿九）

基督に依て眼を開かれしものも教會より放逐せられたり、

彼ら答へて曰けるは、爾は盡く罪孽に生し者なるに反つて我儕を教ふるか、遂に彼を逐出せり、彼等が逐ひ出しゝ事を聞き、イエス尋ねて之に遇ひいけるは、爾神の子を信ずる乎、答へて曰ひけるは主よ彼として我が信ずべき者は誰なるや、イエス曰けるは、爾すでに彼をみる今なんぢと言者はそれなり、主よ我信ずといひて彼を拜せり。

（約翰傳第九章廿四―廿八）

ルーテルも放逐せられたり、ロージヤ、ウヰリヤムスも放逐せられたり、リビングストンが直接傳道を止めて地理學探撿に從事せしが故に英國傳道會社の宣教師たるを辭せざるを得ざるに至りし如く、又彼の支那に於ける米國宣教師クロセツト氏が普通宣教師と異なる方法を採り北京の窮民救助に從事せしに依て終に本國よりの補給を絶たれ支那海に於て貧困の中に下等船客室内に死せしが如く、或は師父ダミエンが生命を拋つてモロカイ島の癩病患者を救助し死して後彼の聲名天下に轟きしや或る米國の宣教師にして神學博士なる某が一書を著して此殉教者生前の名譽を破毀せんとせしが如く、教會に捨てられ信者に讒謗され惡人視せらるゝは決して余のみにあらざるなり。

世ににくまるゝは　われのみならず、
イエスはわれよりも　いたくせめらる、

然れども嗚呼神よ、余は直は全く余に存して曲は悉く余を捨てし教會にありとは斷じて信ぜざるなり、余に欠點の多きは爾のしろしめす如くにして余の言行の不完全なるは余の充分爾の前に白狀する所なり、故に余は余を捨てし教會を恨まざるなり、其内に仁人君子の存するありてその爾の爲めに盡せし功績は決して少々ならざることは余の充分に識認する所なり、其内に僞善壓制卑陋の多少横行するにもせよ、之れ爾の御名を奉ずる教會なれば我何ぞ之を敵視するを得んや、余の心余の祈禱は常に其上にあるなり、余は世に「リベラル」（寛大）なりと稱する人が自己のごとく「リベラル」ならざる人を目して迷信と呼び狹隘と稱して批難するを見たり、願くは神よ

余に眞正の「リベラル」なる心を與へて余を放逐せし教會をも寛宥するを得せしめよ。

余は無教會となりたり、人の手にて造られし教會今は余は有するなし、余を慰むる讃美の聲なし、余の爲めに祝福を祈る牧師なし、然らば余は神を拜し神に近く爲めの禮拜堂を有せざる乎。

彼かの西山に登り、廣原沃野を眼下に望み、俗界の上に立つ事千仞、獨り無限と交通する時、軟風背後の松樹に讃歌を彈じ、頭上の鷲鷹比翼を伸して天上の祝福を垂るゝあり、夕陽已に沒せんとし、東山の紫、西雲の紅、共に流水鏡面に映ずる時、獨り堤上を歩みながら失せにし聖者と靈交を結ぶに際し、ベサイダの岩頭、「サン、マルコ」の高壇、余に無聲の說教を聽かしむるあり、激浪岸を打て高く、砂礫白泡とともに往來する所、ベスホレンの凱歌、ダムバーの砲聲、共に余の勇氣を鼓舞するあり、然り余は無教會にはあらざるなり。

然れども余も社交的の人間として時には人爲の禮拜堂に集ひ衆と共に神を讃め共に祈るの快を欲せざるにあらず、教會の危險物たる余は起て余の感情を述べ他を勸むるの特權なければ、余は竊に坐を會堂の一隅燈光暗き處に占め、心に衆と共に歌ひ、心に衆と共に祈らん、異端の巨魁たる余は公然高壇の上に立ち肅然福音を演べ傳ふるの許可を有せざれば、余は鰥寡孤獨憂に沈むもの、或は貧困縷衣にして人目を憚るもの、或は罪に恥て暗處に神の免を求むるものゝ許を問ひ、ナザレの耶蘇の貧と孤獨と惠とを語らん、嗚呼神よ余は教會を去ても爾を去る能はざるなり、教會に捨てらるゝ不幸は不幸なるべけれ共爾に捨てられざれば足れり、願くは教會に捨てられしの故を以て余をして爾を離れざらしめよ。

第三章　基督教會に捨てられし時　現代語訳

（注意）ここに登場する「キリスト教」や「キリスト教信者」という言葉は、一般的に世間で呼ばれる教会や信者を指すものです。その中に真の教えを信じている人がいるのか、偽りの教えを信じている人がいるのかは、全能の神だけがご存知です。

人間は集まって生きる動物（Gregarious animal）です。単独でいることは、人間の本質ではありません。シラサギのようにたった独りで荒野に巣を作り、聞く者を戦慄させるほど痛切な悲鳴を上げる動物もいれば、マンボウのように大海原に一匹ずつ生息し、ただ寂しさを紛らわせるためにか空に向かって飛び跳ねる奇妙な魚もいます。また、タヌキのように好んで日光を避け、古木の根元や薄暗い岩の間に小さな穴を掘り、生まれて、子を産み、死んでいく動物もいます。しかし、人間は水産業における大いなる富の源であるニシンやタラ、サバのように、南米の糞山（グアノ）を作る海鳥のように、ロッキー山脈を登るヤギのように、集団で生きる動物です。古くから言われているように、単独でいることを喜ぶ者は、神でなければ野獣なのです。

私はこの信仰を持たない国に生まれながら、両親や兄弟、そして国の人々が嫌うヤソ教（キリスト教）に入信しました。私が初めてこの教えを聞いた頃は、日本全国の信徒は二千人にも満たず、特に教会同士は互いに遠く離れていたため、この新しい宗教を信じる者は本当にまばらで寂しい状況でした。しかし、ひとたびその偉大な

教えを耳にしてから、これを自分を救い、国を救う唯一の道だと信じたので、社会に嫌われても気にせず、親戚の反対も意に介さず、多くのこれまでの習慣や人情を断ち切って新しい宗教に入ったのです。その結果、世間との隔絶感は以前にもまして強くなりましたが、同時に同じ宗教を信じる者たちとの親愛の情は、血のつながった肉親以上のものでした。当時、私は「キリスト教会というものは地上の天国で、その中に猜疑心や憎悪は少しも存在しない」と考えていました。信者ではない社会では、何事にも遠慮し、心にもないことを言ったり、心にあることを言わなかったりしますが、この新しい社会では、全教会員が心でつながった兄弟姉妹なのですから、肉親にも話せないことでも自由に話すことができます。もし私が失敗をしても、誰も私の本心を疑う人はいないと確信し、その安心と喜びは、筆や紙ではとても書き尽くせないほどでした。

ああ、なんと懐かしいことでしょう、私が生まれた北の僻地の教会よ。朝に夕に信徒たちが集まり、木曜日の深夜の祈祷会、土曜日の山上での集会、日曜日には一日中話したり、祈ったり、聖書を研究したりしました。たまに病気になる会員がいれば、信徒がみんなで徹夜で看病しました。旅立つ時も、見送られる時も、祈りと賛美と聖書が、私たちの口と心から離れる暇はほとんどありませんでした。たまに外からキリスト教信者がやって来ると、私たちは旧友に会ったかのように、敵地にいる時に味方に会ったかのように、心から喜んで彼らを迎え入れました。キリスト教信者の中に悪人がいるとは、考えようとしても、考えられませんでした。

しかし、この子どもじみた感情は、そう遠くないうちに打ち砕かれてしまいました。私は、キリスト教会が善人ばかりの集まりではないことを悟らざるを得なくなりました。教会の中においても、気を許してはいけないということを知るようになりました。それどころか、私の最も大切にしている意見も、高潔な思想も、勇敢な行動

も、私をキリスト教会に嫌悪感を抱かせる原因となりました。

私はキリスト教に必要不可欠な基本として、以下の大きな箇条を信じています。

あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい。

（出エジプト記20：3、4、5、申命記10：20、マタイの福音書4：10）

そして、神と真理を知る唯一の方法としては、使徒パウロの言葉で、ルターがその信仰の城壁とし、プロテスタントの礎となった以下の言葉を拠り所としています。

兄弟たち、私はあなたがた明らかにしておきたいのです。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。

私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

（ガラテヤ人への手紙1：11、12）

これらの確信が私の心に定まったからこそ、私は決心して、先祖代々の習慣と宗教を脱ぎ捨て、新しい宗教に入ったのです。私は心の自由を得るためにキリスト教に入信しました。僧侶や神官を捨てたのは、別の種類の聖職者たちに縛られるためではありませんでした。

宇宙の神を私の父の父として尊び、彼自身からの啓示を真理の基準と信じ、自分自身の身の振り方においても、国のために尽くそうとする時においても、キリスト教会に対する私の立場においても、私は全てこの基準に従って行動しようと努めました。ところが、私の知能が発達し、経験が積まれるにつれて、そして信仰が進むのと同

時に、私の思想や行動が、しばしばキリスト教の先達者や、神学博士たちと全く意見が合わなくなる事態に至りました。ある時は、私の身の振り方について、忠実な一信徒から忠告を受けることがありました。曰く、「あなたの行いは聖書の明確な教えに反しています。あなたは改めるべきです」と。親愛なる友人の忠告として、私は何度も自分自身を省みました。しかし、熟考に加えて祈りと聖書研究の結果、友人の忠告が必ずしも真理ではないと信じる時は、やむを得ず自分自身の意志に従いました。友人は私を信じてくれているので、私がその言葉に従わないことを敢えて怒りませんでしたが、私を愛していない兄弟姉妹（？）の目からは、私は聖書の教えに逆らった者、キリストから後戻りした者、特別な天の恵みを放棄した者と見なされるようになりました。

私の神学上の思想についても、私の伝道上の方針についても、私の教育上の主義についても、私は私の真理と信じるところを堅く守るがために、ある時には有名で博識な神学者に避けられ、ある時にはキリスト教会内で非常に人望のある高徳な人物から無神論者として排斥された。終いには教会全体から「危険な異端論者」、「聖書を軽蔑する不信心者」、「ユニテリアン（悪い意味で）」、「ヒクサイト（ヒックス派）」、「狂人」、「名誉を追い求める野心家」、「教会の狼」といった名称をつけられ、私の信仰や行いを責めるだけでなく、私の意見も本心もすべて、過酷な批評を受けることになった。

ああ、私は大悪人ではないのだろうか。私は、人も私自身も博識だと認めた神学者に異端論者と断定された。私は本当に異端論者ではないのだろうか。私より十数年も以前からキリスト教を信じ、しかも欧米の大家の信用を得て、全教会の指導者として仰がれるある高徳な人物は、私を無神論者だと言った。私は本当に無神論者では

ないのだろうか。名を宗教社会に轟かせ、インド、中国、日本に福音を伝えること十数年、しかも博士の号を二、三持つ老練なある宣教師は、私はユニテリアンだと言った。私は本当に、救い主の贖罪を信じず、自己の善行にのみ頼るユニテリアンではないのだろうか。伝道医として有力なある教師は、私を狂人であるとの診断を下した。私は本当に知覚を失った者なのだろうか。教会全体は危険物として私を避けた。私は本当に悪魔の使者として、羊の皮をかぶりながら神の教会を荒らすために世に送り出された有害物なのだろうか。私を悪人だと見なすのはすべての人で、弁護するのは私一人だけである。すべての人々の証拠と一人の確信と、どちらが重いのだろうか。そうであるならば、私はキリスト信者ではなかったことになる。私は自己を欺いていた者であり、私の真の性質は悪魔であったことになる。どうして今日からキリスト信者という名を完全に捨てて、普通の世間の生活に戻らないのだろうか。いや、それにとどまらず、私が今日までキリスト教のために尽くした誠実な心と熱心さをもって、私を敵視するキリスト教会を攻撃しないのだろうか。どうして私の敵の神に祈ることができるだろうか。どうして私の敵の聖書を尊敬し研究することができるだろうか。私はユニテリアンであり、無神論者であり、偽善者であり、神の教会に属すべきではない者であり、狼であり、狂人である。よし、今から後はヒューム、ボーリンブルック、ギボン、インガソールの仲間を学んで、一太刀をキリスト教の上に試みようではないか。

この時にあたり、私の信仰はまさに風前の灯火のようであった。私は信仰堕落の最終点に達しようとしていた。憤りや恨みは、私に信仰上の自殺をさせようとした。私の同情は今や無神論者の側にあった。ジョン・スチュアート・ミルの死を聞いて神に感謝したある監督の無情を怒った。トマス・ペインの臨終の状態を要約して意気揚々

とした神学者の粗暴さを嘆いた。ああ、いかに多くの無神論者がキリスト教徒自身によって生み出されていることか。私は以前聞いたことがある。病気ではない人を清潔な寝床に寝かせ、「あなたは危険な病気にかかった患者なので、今は病床の上にいる」と側から絶えず彼に告げると、病気ではない健全な人もすぐに本当の病人になる、と。人を神から遠ざけ、神の教会を攻撃させるものは、必ずしも悪魔とその子どもたちではないのである。

しかし神よ、私の救い主よ、あなたはこの危険から私を救ってくださった。人が聖書をもって私を責める時、それを防御するのに足る武器は聖書である。教会と神学者は私を捨てるとしても、私がまだ聖書を捨てることができないのは、私がまだあなたに捨てられていない一つの兆候である。私はあなたの僕（しもべ）ルターが「私の福音だ」とすがったガラテヤ書に行こう。そして、彼の平易なドイツ語で著述したその注釈書を読もう。「これからは、だれも私を煩わせないようにしてください。私は、この身にイエスの焼き印を帯びているのですから」（六章十七節）。ああ、なんという快さだろう。私も不十分ながらもイエスの名を世人の前に表白したのではないか。私も私の罪から逃れるために「イエス」の十字架にすがっているのではないか。私が信者であるか不信者であるかは、他人の批評がどうであるかによるのではなく、私にイエスの焼き印があるかないかによるのである。「義人は信仰によって生きる」（三章十一節）と。然り、私は今は自己の善行に頼らず、十字架上に現れたる神の小羊の贖罪に頼る。この信仰こそが私が神の子どもであることの証拠である。キリストを十字架につけた者は皆、悪人や無神論者であったのだろうか。彼の弟子を迫害しながら、神に尽くしていると信じた者もいたのではないか。およそヨブの

友は彼の不幸や苦難をもって、彼の悪人であることの証拠とした。けれども神は彼の三人の友に勝って、およそ百人を愛してくださったのではないか。すべての人々の誹謗に対し、自己の尊厳と独立とを維持させる上で、並ぶもののない力を持つものは聖書である。聖書は孤独な者の盾、弱者の城壁、誤解された人物の憩いの場である。これによってのみ、私は法王にも大監督にも神学博士にも牧師にも宣教師にも抗することができるのである。私は聖書を捨てることはない。他の人は彼らに抗議するために聖書を捨て、聖書を攻撃した。私は私の弱さを知っているので、聖書という鉄壁の後に隠れ、私を無神論者と呼ぶ者、私を狼と称する者と戦うだけである。どうしてこの堅固な城を彼らに譲り、野外の無防備な地に立って、彼らの無情、浅薄、狭量、固執の矢にこの身を晒す必要があるだろうか。

With one voice, O world, though thou deniest,
Stand thou on that side — for on this I am !

世人は同音一斉に私を拒むとしても
彼らは彼方に立て、私ひとり此方に立とう

その時、悪霊が私に告げて言うには、「お前はまだ若年で、経験を積んでおらず、学問も未熟である。どうして自分の身を先達である老練家の指揮に任せないのか。自己の言動を最良なものと見なすのは平凡な人間がすることであり、お前が他人の言葉を受け入れないのは、お前が高慢で不遜であることの証拠である。お前は自己を最も才知があり、最も学識があり、最も経験があるものとしているのか」と。

私は私の無学無知であることを知っている。また大監督や神学博士の声名が決して軽んずべきものではないことを知っている。しかし、私が無学であるという理由で、私の身も信仰も働きもこれら高名な人々の手に任すべきだ、となるならば、私はまだ自己を支配することができない者である。私にしてこれと彼とを区別する力がなければ、私は誰によって身の振り方を決めたらよいのだろうか。見よ、彼ら私の不遜を責める者たちもまた、互いに説を異にしているではないか。監督教会は自己の教会を「The Church（唯一の教会）」と称し、一方でローマ教会の勝手な振る舞いを非難しながら、他方では他の新教徒にDissenters（分離者）とかNonconformists（不適合者）といった聞き心地の悪い名称をつけているのではないか。私は組合派の教師が、私が最も信頼するメソジスト派の教師を罵倒するのを耳にした。ユニテリアンは正統派（オルソドックス）の迷信を笑い、後者は前者の不遜や異端を責めているのではないか。その他、長老派の頑固さ、浸礼派の独善的であること、あるいは「クリスチャン」派とか、新エルサレム派とか、ブラザレン派とか、各々その特殊な教義を揚言し、自派を賞賛して他派を蔑視しているのではないか。博識や才能のある者がどうして一派だけの特有物であるだろうか。私にして自己の信仰を定めることができなければ、私は一体どの派に自己を投じるべきなのだろうか。枢機卿マニングがカトリック教会の高僧であったから、私は法王の命令に従うべきだろうか。監督ヒーバーやディーン・スタンレーが英国監督派であったから、私は監督教会に属すべきだろうか。ジャドソンが浸礼教会の人であったから、私は「バプテスト」であるべきだろうか。リビングストンが長老教会の人であったから、私もまた彼と同じ教派にすべきだろうか。もし人物をもって私の教会上の立場を定めるべきだとするならば、私はユニテリアンであるべき

である。なぜなら、私が最も尊敬するチャニング、ガリソン、ローエルのような人々はユニテリアン教に属していたからである。私はクエーカーであるべきである。なぜなら、ジョージ・フォックス、ウィリアム・ペン、スティーブン・グレレット、ウィスター・モリスといった人々は友会派の人々であったからである。私は普通のキリスト教徒が論ずるに足りないものと見なす小教派の中にも、立派な君子や貞淑な貴婦人をこの目で見た。悪魔よ、お前の説教をやめよ。もし私にして善悪を区別し、これを選び、あれを捨てる力がなければ、私は他人の奴隷となるべき者である。心霊の貴重な点は、その自立の性質にある。最も小さな私であっても、ひとたび全能者と直接の交流を為し得るものである。神は法王、監督、牧師、神学者たちの手を経ずに、直接に私を教えてくださるのである。

ああ、真理である神よ、願わくは私を永久の愛においてあなたと一つにさせてください。私は時々、多くの事柄に関して読んだり聞いたりすることに飽きた。私の欲するところ、望むところは、すべてあなたにこそ存在する。すべての博士たちを黙らせてください。万物はあなたの前に静かにならせてください。そして、あなただけが私に語ってください。

トーマス・ア・ケンピス

他人の忠告を決して軽んずべきではない。人は自身の顔を見ることができないように、社会における自分の位置もよく見ることができないだろう。一切万事、自分の意見を押し通そうとするのは、傲慢で頑固であることの兆候であり、私たちが注意すべきことである。

そうであるからといって、自己の意見をすべて信用すべきではないと断念することも、また弱い意志や病的な考えの兆候である。ここに博士モズレーの言葉を聞け。

“It is not partiality to self alone upon which the idea is founded that you see your own cause best. There is an element of reason in this idea; your judgment even appeals to you, that you must grasp most completely yourself what is so near to you, what so intimately relates to you; what by your situation, you have had a power of searching into.” —— Mozley's Sermon on “War”.

人が、ことさらに自分こそがその主張の正しさを見極められると思うのは、必ずしも自分自身への偏った思い込みによるものではなく、公平な理由の中にもその根拠がある。私たちが理性に訴えるとき、私たちに近く、私たちと密接な関係を持ち、私たちの立場から自由に探究できる事柄については、私たち自身が最も十分にそれを理解しうるのは、理の当然である。

（「戦争」と題する説教中　モズレー博士の語）

私は日本人である。ゆえに、日本国と日本人民に関しては、私は英国の碩学よりも、米国の博士よりも完全な思想を持っているはずである。そして、この国とこの民を教化するにあたっては、私は彼らに勝り、確実な観念を持つことは当然である。私はアイヌ人の国へ行ったとしても、私がアイヌ人に勝る学識を持っているという理由で、アイヌ人に関するアイヌ人の思想を軽んじたりはしない。私は山中で小道を探すとき、私が地理天文に通じているという理由で、樵夫（しょうふ）の指揮を見下したりはしない。私が自国と国民に関して、外国人の説をすべて受け

入れないのは、必ずしも私の傲慢さによるものではない。日本は私の生まれた国であり、私の全身はこの国土につながっているのだから、私のこの国に対する感情が他国人に勝るのは当然である。利害が大きく関わる私の自国に関する私の観念は、他国人のこの国に対する観念よりも健全で確実であると信じることは、決して自身をほめそやす度を超えた行為であるとは言えない。また、私の一身の分担について、私は私自身の事柄に関しては最大最良の専門学者である。神の霊なしには神の事を知る者はいない。私の霊のみが私の事を知っている。私の神に対する信仰もまた同様である。私に最も近く、かつ私が最も知りやすいものは神である。哲学者ライプニッツは次のように言っている。

God is the only immediate and outward object of the soul — external objects of sense are but mediately and directly known. ——Leibnitz

〔心霊以外のものにして、直接に認識し得るものは神のみであり、感覚機能をもって知り得る外側の対象は、ただ間接にのみ認め得る——ライプニッツ〕

私は私の神を知るにあたって、プロテスタント教徒全体がローマ法王の取り次ぎを必要としないように、監督や執事や牧師や執事や勧士の取り次ぎを必要とはしないのである。

反対論者は次のように言う。「もしあなたの説のとおりならば、教会の使い道はどこにあるのか。人は一人では立つことができないからこそ、教会の必要性があるのではないか」と。

それは浅薄な議論である。同じ議論をもって天主教会は千五百年来、他のキリスト教徒を責め続けている。同じ議論をもってアリビゼンス教徒は殺戮され、セルビタスは焼き殺された。教会というものは、神の子どもの集合体であり、無私、公平、和愛、慈悲が凝結したものである。真の信徒がいて教会があるのであって、教会があって信徒がいるのではない。信徒は自然に教会を造るものだ。あたかも同じ幹から養分を吸収している枝葉が一つの植物であるのと同じである。人が真理を知る力を持っており、直接に神の「インスピレーション（霊感）」に接することができると信じるのが、私のキリスト教の基本原理である。真理は真理の証である。教会は必ずしも真理の証ではない。教会は真理を学ぶ上で良い助けにはなるだろうが、真理は教会外においても学ぶことができるものだ。

“The destruction of the theory of the infallibility of the Bible has been one of the means by which we have been prevented from resting in the external and mechanical, and driven to what terrifies us at first as the intangibility and vagueness of the Spirit.” —— Rev. J. Llewellyn Davies, in the Fortnightly Review, reprinted in the Library Magazine of March, 1888.

聖書無誤謬説の破壊は、私たちを外形的で機械的な基盤から離れさせ、当初は手で触れることもできず、定義もできないとして、私たちを恐れさせた霊の土台に頼らざるを得なくした手段の一つである。

（リューウェリン・デビス教師の語）

教会無誤謬説も聖書無誤謬説と同時に、中世の陳腐な遺物として二十世紀の人心から棄却すべきものである。

これは理論である。しかし、世はまだ理論の世ではない。憎しみや愛は理論的ではない。人は服従を愛し、抵抗を憎むものだ。たとえ私が理論上確実であっても、私が先輩たちと意見を同じくせず、彼らの指揮に従わなければ、その保護の下に置かれないのは決して怪しむべきことではない。私は教会に捨てられた。私は現世の楽園と頼みにしていた教会から勘当された。

ああ神よ、この試練が私がまだ十分にあなたを知らない時に来ていたなら、私は全くあなたの手から離れていただろう。けれども、あなたは私に耐えられない試練を与えず、教会は私が自立できる時に私を捨てた。教会が私を捨てた時、あなたは私を取り上げた。私の愛するものが去り、私はますますあなたに近づき、国人に捨てられて私はあなたの懐にあり、教会に捨てられて私はあなたの心を知った。

教会が私を捨てなかった前は、私は教会外の人々を見る目が実に不公平であった。私はキリスト教外に善人はいないと考えていた。未信者を神の子どもと呼ぶべきではないと思っていた。ところが、教会が私を冷遇し、その教師や信徒が私の本心までも疑う時に、教会外の人々が逆に私の真意を諒察するのを見て、私は天の父の慈悲が、なお多量に未信者の社会に存在することに気づいた。また、教会外に立って局外からこれを見る時、今日までは神の導きによって歩む仁人君子の集合体だと思って

いた教会の内にも、猜疑、偽善、佞奸(ねいかん)の存在がないわけではないことを知った。尖塔が天を指して高く、風琴が楽を和して幽玄な場所のみが神の教会ではないことを知った。孝行な子が家計の貧しさを補うために、寒い夜に物を売る場所こそ神の教会ではないか。貞淑な妻が夫の病を案じ、夜明け前に祭壇に願いを込める場所こそ神の

教会ではないか。私が世の誤解するところとなり、攻撃が四方から起こる時、友人が一人立ち、私を弁護する時こそ神の教会ではないか。ああ、神の教会を白い壁や赤瓦の内に存在すると思っていた私の拙さよ。神の教会は宇宙の広さのように広く、善人の多さのように多い。私は教会に捨てられた、そして私は宇宙の教会に入会した。

私は教会に捨てられて初めて、寛容と寛宥の美徳を理解することができた。私が細心の注意を払いながら神と国に仕えようとしている時に、私の神学上の説が異なるという理由で、教会は私の本心と意志に疑念を抱き、ついには私を悪人と見なすに至った。

ああ、私は私が他人を裁いたように裁かれた（マタイの福音書 七章一、二節）。私も教会の中にいた間は、教会外の人々を論じるにあたってこのようにあったのだ。キリスト教を信じないから未信者は皆信用できない。法王に頼るから天主教徒は汚れた豚の子である。ロシア人宣教師に教化されたギリシア教徒は国賊である。監督教会は英国が世界を略奪するための機関であり、その信徒は金銭のために使役される探偵である。長老教会は野心ある人々の集合所である。メソジスト教会は無用の人物の巣窟である。クエーカー派は偽善であり、ユニテリアン派は偶像教に勝る異端である、と。もし誰かの宗教事業が盛んであると聞けば、「彼は世人にへつらうから、彼の教会に聴衆が多い」と言う。誰かの学校の隆盛を聞けば、「彼は高貴な人に媚びるから成功した」と言う。私は、真の善人にして私と説を同じくしない理由はない、と考えていた。天主教徒であり、ユニテリアンであり、メソジストであり、プレスビテリアンである者たち、皆それぞれ肉欲を満たすべきものがあるからそうなのであろう、と。しかし、教会に捨てられてから私の目は開かれ、私の推察の情は俄然増加した。学説を異にしても本心は善

人たるを得るという大真理を、私はこの時に初めて学び得た。真理は私一人の所有ではなく、宇宙に存在するすべての善人の所有であることを知った。心の奥底から天主教徒である人を私は想像できるに至った。十分な良心の許可を得てユニテリアンであることを私は疑わなくなった。私は初めて世界に宗教が多い理由と、同じ宗教内に宗派が多く存在する理由とを理解した。真理は富士山の壮大さのように大きい。一方からその全体を見ることはできないのだ。駿河から見る人は「富士山の形はこのようだ」と言い、甲斐から見る人は「このようだ」と言い、相模から見る人は「このようだ」と言う。駿河の人が甲斐の人に向かって「お前の富士は偽りの富士だ」と言うことができようか。もし自ら甲斐に行ってそれを望めば、甲州人の言うことが無理ではないことを知るだろう。人間の力が限られていることと、真理が無限無窮であることを知る人は、思想のために他人を迫害したりはしない。全能の神のみが真理の全体を会得できる。他人を裁く人は、自己を神と同視するものであり、傲慢という悪霊の虜になった者である。己が人に施されたいと思うことを、また人にもそのように施せ。私は無神論者ではないが、無神論者と見なされた。私はユニテリアンではないのに、ユニテリアンとして遠ざけられた。私を迫害した者たちは、私の境遇や教育、遺伝を知らないために私の思想を理解することができず、私が彼らと同じ説を維持しないという理由で私を異端とし、悪人とした。私は今より後、私と説を異にする人を見るにあたって、そのようなことはしないだろう。欧米人が日本人の思想をすべて理解できないように、日本人にも欧米人の思想を完全に理解することは難しいだろう。然り、寛容はキリスト教の美徳である。寛容でない者はキリスト教徒ではない。

教会に捨てられたのは私一人ではない

これを聞くと、会堂にいた人たちはみな憤りに満たされ、立ち上がってイエスを町の外に追い出した。そして町が建っていた丘の崖の縁まで連れて行き、そこから突き落とそうとした。

（ルカの福音書四章二八、二九）

キリストによって眼を開かれた者も教会から追放された。

彼らは答えて言った。「おまえは全く罪の中に生まれていながら、私たちを教えるのか。」そして、彼を外に追い出した。

イエスは、ユダヤ人たちが彼を外に追い出したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」

その人は答えた。「主よ、私が信じることができるように教えてください。その人はどなたですか。」

イエスは彼に言われた。「あなたはその人を見ています。あなたと話しているのが、その人です。」

彼は「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した。

（ヨハネの福音書九章三四―三八）

ルターも追放された。ロジャー・ウィリアムスも追放された。リビングストンが直接伝道を止めて地理学探検

に従事したために、英国伝道会社の宣教師であることを辞せざるを得ない事態に至ったように、また、彼の中国における米国宣教師クロセット氏が普通の宣教師とは異なる方法を採り、北京の窮民救助に従事したことによって、ついに本国からの補給を絶たれ、シナ海において貧困の中に下等船客室内に死んだように、あるいは、師父ダミエンが生命を投げ打ってモロカイ島の癩病患者を救助し、死んで後、彼の声名が天下に轟いた時に、ある米国の宣教師にして神学博士である某が、一書を著してこの殉教者の生前の名誉を破毀しようとしたように、教会に捨てられ、信者に讒言され、悪人視されるのは、決して私だけではないのである。

世に憎まれるのは私だけではない。

イエスは私よりもひどく責められるのである。

けれどもああ神よ、私は、正しさは全く私にあり、間違いはすべて私を捨てた教会にあるとは断じて信じていない。私に欠点が多いことは、あなたがご存知である通りであり、私の言動が不完全であることは、私が十分にあなたの前で白状するところである。ゆえに、私は私を捨てた教会を恨まない。その教会の内に仁徳のある立派な人物が存在し、その人たちがあなたのために尽くした功績は、決して少なくないことを私は十分に認識するところである。その教会の内に偽善や抑圧や卑しさが多かれ少なかれ横行するにしても、これはあなたの御名を奉じる教会であるから、私がどうしてこれを敵視することができようか。私の心、私の祈祷は常にその教会の上にあるのである。私は世に「リベラル」（寛大）であると称する人々が、自分自身のように「リベラル」でない人々を見て、迷信と呼び、狭隘と称して非難するのを見た。神よ、私に真に寛大な心を与え、私を追放した教会をも

寛容にすることを可能にしてほしい。

私は無教会となった。人の手によって造られた教会を今、私は持つことはない。私を慰める賛美の声もない。私のために祝福を祈る牧師もいない。であるならば、私は神を拝し、神に近づくための礼拝堂を持たないのか。

あの西山に登り、広々とした野原や肥沃な土地を眼下に眺め、俗世間の上に立つこと千仞（非常に高い場所）において、一人無限と交流する時、柔らかな風が背後の松の木に賛歌を奏で、頭上の鷲や鷹が翼を伸ばして天上の祝福を垂れることがある。夕陽がすでに沈もうとし、東山の紫、西の雲の紅が、共に流れる水の鏡面に映る時、一人堤の上を歩きながら、失われた聖者と霊的な交わりを結ぶに際し、ベサイダの岩頭、「サン・マルコ」の高壇が、私に無言の説教を聞かせることがある。激しい波が岸を打って高く、砂利が白い泡と共に打ち寄せたり引いたりする場所において、ベツレヘムの凱歌、ダムバーの砲声が、共に私の勇気を鼓舞することがある。そうである、私は無教会ではないのである。

けれども私も、社会的な人間として、時には人造りの礼拝堂に集い、大衆と共に神を賛美し、共に祈る快感を欲しないのではない。教会の危険人物である私は、立ち上がって自分の感情を述べ、他者を勧める特権がないから、私はひそかに会堂の隅の灯りの暗い場所に席を占め、心の中で大衆と共に歌い、心の中で大衆と共に祈ろう。異端の巨魁である私は、公然と高壇の上に立ち、粛然と福音を演説し伝える許可がないから、私は寡婦や孤児、孤独で憂いに沈む者、あるいは貧困でぼろをまとい人目を憚る者、あるいは罪に恥じて暗い場所で神の赦しを求める者たちのもとを訪ね、ナザレのイエスの貧しさと孤独と恵みとを語ろう。ああ神よ、私は教会を去ってもあ

なたを去ることはできない。教会に捨てられる不幸は不幸であるに違いないが、あなたに捨てられなければ十分である。願わくは、教会に捨てられたという理由をもって、私にあなたから離れないようにさせてほしい。